

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 ライアン シャルジアン モリソン

本論文は、石川淳の初期作品から、短篇小说「佳人」(1935年)、「山桜」(1936年)と評論「文章の形式と内容」(1940年)、「短篇小说の構成」(1940年)、「江戸人の発想法について」(1943年)の計5篇を取り上げ、テキストそのものの丁寧で緻密な読解に基づきながら、戦前・戦中の時期における石川淳の創作および文学観の特徴を明らかにしたものである。

「佳人」を扱った第1章では、石川淳がこの作品において、当時の日本の文壇で根強かった写実的リアリズムに対抗して、様々な文学的媒介(mediation)を用いたことを具体的に示している。著者の整理によれば、この文学的媒介は「表層媒介」「深層媒介」「自己言及的媒介」「象徴的媒介」の4種類になり、いずれも、媒介抜きに現実をありのままに描く「直接性」を特徴とするミメシス的なリアリズムの手法に挑戦する方法として活用されていた。

第2章はツベタン・トドロフの幻想文学論を援用しながら、「山桜」が「寓意的ファンタジー」のジャンルに属するものであることを示した。トドロフは幻想文学の特徴を「ためらい」としたが、モリソン氏はその論をさらに進め、「山桜」において語り手の「私」と読者がそれぞれ異なった「ためらい」を経験する仕掛けを持っていることを鮮やかに論証している。

第3章で取り上げられる「文章の形式と内容」および第4章で取り上げられる「短篇小说の構成」は、ともに単行本『文学大概』に収録された評論で、石川淳の文学観をよく示すものである。どちらの章も石川淳のテキストに密着しながら詳細な分析を加えたうえで論旨を整理し、石川淳が規範を直接示さずに間接的に、「純粋散文」や「小説」についての自らの理念を主張していることを明らかにした。

最後の第5章は、石川淳の評論の中でも特に重要な「江戸人の発想法について」を取り上げ、これは単なる江戸回帰趣味でもなければ、戦時下における「消極的抵抗」でもないとしたうえで、石川がここで真の批判の対象としたのは写実的リアリズムであったことを強く主張していて、説得力がある。

ただし、今後の課題としてさらに取り組まなければならない点も残されている。石川淳がいわば仮想敵とした日本近代の「写実的リアリズム」や「私小説」といった手法やジャンルについての理論的分析もまだ必ずしも十分とは言えず、同時代の日本および世界の文学の動向との関係についてもさらに広い視野からの検討が必要であろう。

しかし、本論文は政治的解釈にも抽象的な理論化にも偏らず、歴史的な文脈や伝記的研究からも一線を画し、難解なテキストそのものを丁寧に読解する作業を通して石川淳の手法と文学観を鮮やかに示すことに成功している。石川淳はその重要性にもかかわらず、海外ではまだ翻訳も研究も乏しい状態であるだけに、本論文はこの作家の真価を国際的に知らしめる英語による先駆的業績としての意義も高い。このような評価を総合して、審査委員会は本論文が博士(文学)の学位を授与するに相応しいとの結論に至った。